

総題 「イザヤ」

第7課 アッシリア人の敗北

武田 将弥

1. 安息日午後

イギリスのロンドンに「大英博物館 (ブリティッシュ・ミュージアム)」という、とても有名な博物館があります。私も20年くらい前に一度だけ行ったことがあります。美術品や歴史的に価値のあるとても珍しいものが数え切れないほど展示されていました。今は新型コロナウイルスが世界中で流行っているため、海外旅行に行くのは難しいですが、インターネットで大英博物館のホームページを開くとパソコンの画面越しに、館内の様子を誰でも簡単に見ることが出来ます。

今週のガイド(49p)の説明に書いてある壁画を、私もインターネットで調べてみると、博物館の展示品の中に「アッシリアのセンナケリブ王」についての記録が描かれた壁画がありました。その壁画には戦争で激しく襲われるラキシユの町や、捕虜が残酷な方法で傷つけられている様子などが描かれています。イザヤ書 36:1 や列王記下 18:13 のお話が本当にあった出来事であり、当時の様子がイメージしやすくなりました。

- ※1 価値のある: 意味ある
※2 数え切れないほど: とてもたくさん

2. 日曜日: 付帯条件

南ユダ王国のアハズ王は、アッシリアの属国になって従うことで、守ってもらうことにしました。しかしアッシリアの国と仲良くすると、自分たちの国に偶像礼拝をする習慣が入ってきてしまいます。それに守ってもらう代わりに「みかじめ料 (用心棒代)」を払わされ続けました。アハズ王は神様に守ってもらうことを考えず、人間に助けってもらうことを考えたのでした。やがて神様が悲しまれることを数多くしてきた悪王のアハズは死んで、逆に神様が喜ばれることを一生懸命に行う息子ヒゼキヤが王様になります。このヒゼキヤ王は自分の父親たちが行ってきた偶像礼拝などの、神様が嫌うものを次々と禁止し、国を正しい姿に戻そうと努力したので、神様がいつも守ってくれました。

そんなある時^{とき}アッシリアの王様^{おうさま}が死^しんで、センナケリブという人^{ひと}が新^{あた}しいアッシリアの王様^{おうさま}になります。この時^{とき}をチャンスだと考^{かんが}えたエジプトやバビロニアの国^{くに}々が、アッシリアと戦^{せんそう}争^{はじ}を始^{はじ}めます。ヒゼキヤ王^{おう}も良いチャンスだと考^{かんが}えて、ヤクザのようにお金^{かね}を要^{よう}求^{きゅう}してくる怖^{こわ}くて乱^{らんぼう}暴^{ぼう}なアッシリアと決^{けつ}別^{べつ}することになりました。しかし予^よ想^{そう}とは違^{ちが}ってエジプトやバビロニアは負^まけてしまい、怒^{おこ}ったアッシリアは次^{つぎ}々と町^{まち}を攻^{こう}撃^{げき}し、ついにヒゼキヤのいるエルサレムまで軍^{ぐん}隊^{たい}で攻^せめてきました。

3. 月曜日：宣伝工作

エルサレムのヒゼキヤ王^{おう}は、敵^{てき}が攻^せめてくることを知^しって、自^じ分^{ぶん}の兵^{へい}隊^{たい}や石^{いし}の壁^{かべ}を強^{つよ}くして戦^{たたか}いに備^{そな}えました。敵^{てき}のセンナケリブ王^{おう}は^{※3}残^{ざん}酷^{こく}な性^{せい}格^{かく}で、ととも頭^{あたま}が良^よい人^{じん}物^{ぶつ}でした。戦^{せん}争^{そう}を始^{はじ}める前^{まえ}にエルサレムの戦^{たたか}う気^きを無^なくすために、アッシリアの高^{こう}官^{かん}だっただラブ・シャケという話^{はなし}の上^{じょう}手^ずな人^{ひと}を使^{つか}って、やる気^きを失^{うしな}わせる作^{さく}戦^{せん}に出^でます。ラブ・シャケは「お前^{まえ}たちの王^{おう}、ヒゼキヤにだまされるな！ それに神^{かみ}様^{さま}が守^{まも}ってくれるわけないだろう。あれだけ強^{つよ}かったエジプトだっただ負^まけたんだ。だからお前^{まえ}たちの小^{ちい}さな国^{くに}なんか簡^{かん}単^{たん}に負^まけてしまうぞ。いま降^{こう}参^{さん}すれば命^{いのち}だけ^{たす}は助^はけてやる。早^{はや}くエルサレムの町^{まち}を俺^{おれ}たちによこせ〜！」と、大^{おお}声^{こえ}で呼^よびかきました。

実^{じつ}はこのセンナケリブとラブ・シャケは、悪^{あく}魔^まサタンとそっくりです。サタンも^{※3}残^{ざん}酷^{こく}で頭^{あたま}がよ^よく、お話^{はなし}がと^{じょう}ても上^{じょう}手^ずなのです。そして言^いっていることは、ほ^{ほん}と^とん^とん^と本^{ほん}当^{とう}のこと^{こと}なのです。しかし悪^{あく}魔^まは話^{はなし}の中^{なか}に、ほん^{ほん}の少^{すこ}し^{すこ}だけウソ^まを混^まぜて話^{はなし}しかけてきます。だからウソ^{ほん}か本^{ほん}当^{とう}か^みわ^わけ^かが難^{むず}か^かしいので注^{ちゅう}意^いが必^{ひつ}要^{よう}です。

※3 残酷：人^{さん}や動^{どう}物^{ぶつ}に苦^{くる}しみ^あを^あ与^へえて平^{へい}気^き

4. 火曜日：揺り動かされるが、捨てられない

恐^{おそ}ろしいセンナケリブ王^{おう}や高^{こう}官^{かん}のラブ・シャケを通^{とお}して、悪^{あく}魔^まサタンはヒゼキヤ王^{おう}の信^{しん}仰^{こう}を攻^{こう}撃^{げき}してきま^ました。みんなの心^{こころ}は動^{どう}揺^{よう}しますが、神^{かみ}様^{さま}に祈^{いの}って助^{たす}けを求^{もと}めます。するとイザヤを通^{とお}して「大^{だい}丈^{じょう}夫^ぶだから安^{あん}心^{しん}しなさい。私^{わたし}はあな^あた^たを^を守^{まも}り抜^ぬいてあげます。」と励^{はげ}まし^しのメ^めッ^めッ^めッセージ^じが与^あえ^えられ^られ^れました。だからヒゼキヤ王^{おう}はアッシリア軍^{ぐん}の恐^{おそ}ろしい脅^{おど}しに屈^{くつ}しないで、エルサレム^あを^わた^たす^すこ^こを勇^{ゆう}気^きと信^{しん}仰^{こう}を持^もつて断^{こと}り^わりました。

5. 水曜日：物語の続き

神^{かみ}様^{さま}はヒゼキヤの信^{しん}仰^{こう}に答^{こた}えてくださ^さり、約^{やく}束^{そく}通^どりにエルサレム^{たす}を助^{たす}けてくれ^れました。なんと夜^よ中^{なか}のう^うちにアッシリア軍^{ぐん}の18万^{じゅうはちまん}5千^{ごせん}人の兵^{へい}隊^{たい}たちが、主^{しゅ}の御^み使^{つか}いによ^よつて打^うち倒^{たお}されたのです。さすがのセ

ンナケリブ王も兵隊がいなくては戦えないので自分の国に戻っていきましたが、※4暗殺されてしまいました。普通に考えてエルサレムには絶対に勝ち目はありませんでしたが、神様が守ってくださったので助かったのです。

※4暗殺：こっそりと殺されて

6. 木曜日：病と富

戦争が終わるとヒゼキヤ王は重い病気になりますが、神様に祈って寿命を延ばしてもらいます。そしてこの奇跡が本物の奇跡である証拠として、太陽を少し後戻りしてみせました。こんなことは神様にしかできません。この太陽の不思議な動きに気がついたのがバビロニア人でした。イエス様が生まれた時に不思議な星の導きによって神様と出会えた東方の博士たちと同じように、バビロニアの人たちも導かれました。

バビロニアの王様も乱暴なアッシリアに手を焼いていました。ヒゼキヤ王の重病が治ったことや、太陽が不思議な動きをしたり、戦争でも守られたことを噂で知って、ユダの国エルサレムには神様が味方していると感じたと思います。だから仲良くするために家臣をエルサレムに送ってお見舞いをしました。気分を良くしたヒゼキヤ王は、バビロニアのお客たちを歓迎し、自分の国にある財宝や武器など、全ての物を見せて自慢してしまいます。

7. 金曜日：さらなる研究

ヒゼキヤ王の重い病気が癒やされたのも、太陽が不思議な動きをしたのも、勝ち目のない戦争に勝ったのも、すべて神様のお陰でした。ですから財産や持ち物などは全て神様による物であって、自分の物は何一つありません。人間は謙虚にならざるを得ないことを、ここでは教えています。

★振り返りの質問★

あなたは絶体絶命のピンチになってしまったことはありますか？ その時に自分を支えてくれたものは何でしたか？ 可能であれば誰かと自分たちの経験を分かち合ってください。